



鶴岡市 月山高原ひまわり畑

夏の香り 蘇る遠い日の記憶

 荘内銀行

Cradle

夏号

出羽庄内地域文化情報誌「クレードル」

令和8年7月1日発行
2026 Summer vol.91

発行／Cradle事務局 山形県鶴岡市山王町18-15「株式会社 出羽庄内地域文化情報誌」電話0234(64)0888
制作／Cradle編集部 山形県酒田市京田2-59-3「コソツ・コミュニケーション」電話0234(41)0012

暮らす人の数だけ、旅がある

Cradle

夏号

vol.91
2026 Summer

出羽庄内地域文化情報誌 [クレードル]

特集

わたしたちの
庄内旅



ご自由にお持ちください
TAKE FREE

左内への手紙
[9通目]

食のパラダイス

フードジャーナリスト

斎藤 理子



月山や鳥海山の雪解け水に満たされ、美味しい米を生み出す庄内平野

私と庄内との出会いは、2005年5月。ある雑誌の企画で地方の美味しいイタリアンを探していた時に、地方紙の小さな記事でアル・ケッチアーノを見つけ、強く惹かれるものを感じて奥田政行シェフに会いに行ったのです。

生まれて初めて庄内空港に降り立った私を、ニコニコしながら出迎えてくれたのが、コックコートを着た奥田シェフでした。「さあ、行きましょう」との言葉と共に始まった庄内の生産者めぐり。庄内砂丘や由良港から始まり、畑、野原、河原、牧場、山々と庄内平野を走り回り食材を調達していく奥田シェフは、それまで私が出会ったことのない料理人でした。そしてこれが今でこそ予約が取れないほど有名になった、「食材はすべて店から30km以内で手に入れる」「奥田シェフ食材調達ツアー」の原型、それは衝撃の初体験でした。

集めた食材を、奥田シェフは今までに食べたことがない極上の料理に仕立てます。イタリアンという概念をはるかに超えた奥田料理と食材の素晴らしさに、私は一発で庄内の魅力にハマってしまいました。すぐに編集部で電話して、ページを増やしてくれるよう頼み、それが奥田さんの実質的な全国メディアデビューになりました。それからの活躍ぶりは、みなさんご存知の通りです。

あまりに庄内にハマってしまった私は、別の雑誌で奥田シェフの連載を企画しました。それは2年半続き、単行本にもなりました。2年半の間、毎月庄内に通う日々の中でたくさん素晴らしい生産者さんたちと出会い、それは今でも私の貴重な財産になっています。特に、井上農場の井上馨さんと悦さんは米作りのイロハや庄内の文化などを教えてくれる師匠。私が今、少しでも米作りの話ができるているとすれば、それはすべて井上夫妻のおかげです。料理上手の悦さんが作る郷土料理の数々を、雑誌で紹介させていただいたのも楽しい思い出です。

最上川や赤川が運ぶ肥沃な土壌が月山や鳥海山の雪解け水に満たされて、素晴らしく美味しい米を生み出す庄内平野。130種類以上の魚介が水揚げされる庄内浜。無数の山菜やキノコが群生する山々。60種類以上もの在来野菜があり、真摯で研究熱心でポリシーがあつてブレない熱い生産者が集まっている土地。庄内は、食に興味がある人すべてにとってのパラダイスです。

出羽三山神社の三神合祭殿や羽黒山五重塔、月山の弥陀ヶ原湿原など、庄内には究極の癒やしスポットもたくさんあります。こんな魅力的な土地に出会い、20年以上もお付き合い合わせていただいている幸せを噛み締めるから、今年も私的に日本一だと思っています。赤川花火大会に行くべく画策しています。

さいとう・りこ | フードジャーナリスト

雑誌編集者を経てロンドンなど海外に長年住み、その間世界各国を食べ歩く。現在は国内外の生産者から三つ星シェフ、立ち飲みまで広く取材し、雑誌やWEBを中心に執筆。著書に「イギリスを食べつくす」(主婦の友社)、「隣人たちのプリティッシュスタイル」(日本放送出版協会)など。編著に「アル・ケッチアーノ」の奥田政行シェフの連載をまとめた「田舎町のリストランテ、頑張る」(マガジンハウス)や、「イングランドで一番美しい場所 コッツウォルズ」(ダイヤモンド社)など。2011年英国政府観光庁メディアアワード受賞。現在、やまがた特命観光・つや姫大使。

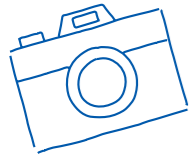


この土地に暮らす人の数だけ、「ここが好き」と思う景色や時間、
 立ち寄りたくなる場所があります。
 誰かのまなざしを通すことで、見慣れたところも、
 はじめて訪れる場所も、少し違って見えてきます。
 今回は、地域に暮らす人たちが案内人。
 地元の人だからこそ知っている、とっておきの旅へ出かけます。

特集

ここに並んだ写真は、クレードル編集部が誰かを案内したいところや好きなところですが、しかしこれはほんのごく一部。考え出すとあっちもこっちも、そんな場所が庄内にはたくさんあります。

わたしたちの庄内旅



特集
わたしたちの
庄内旅



「庄内愛が強すぎて(笑)」と話すフォトグラファーの楽智さんの写真は、その愛を転写したように「庄内っていいところだなあ」と地元に住む私たちをもハッとさせます。被写体は、自然、まち、人々、くらし、そのどれもが庄内を表す風景。子どもたちの心の景色にも刻んでほしい、旅のスポットを紹介してもらいました。

親子で楽しむ大自然と食をめぐる初夏の旅

海と空

大好きな海へすぐに行ける環境がうれしい！庄内の美しい景色は癒やしのパワーがすごいのです。

海のない埼玉県で育った私にとって、母の実家がある庄内はワクワクがたっさんあるところでした。夏休みになると海がある庄内に来るのが楽しみで楽しみに♪ ワクワクしながら夜行列車に揺られたことを鮮明に覚えています。移住して40年たった今も、海を見たり雪が降ったりするとテンションが上がります(笑)。庄内にはデイズニードやUSJのような華やかなレジャー施設はないけれど、大自然を体験&体感、満喫できる素敵なお店。ただ他県に行くとき「山形県ってどこらへん？」「庄内ってどこ？」と聞かれ、地元の人からは「こんだ何もねどござ、よぐ来たのー」と言われ、シヨックと悔しさを覚えたものです。こんなにも素敵な庄内の魅力を地元の人に伝えたい！たくさんの人に足を運んでもらいたい！その思いで心で撮り写す

「写心」と名付けて、個展やSNSを通じて魅力を伝え続けてきました。地元に住んでいるからこそ知っている、驚きと感動の風景。さらに庄内は、海の幸、山の幸、人の幸に恵まれた食材の宝庫でもあります。安心・安全・お



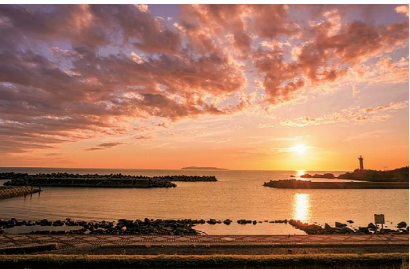
「食を通じて子どもたちの未来を育む」をテーマに活動してきたサステイナ鶴岡。2025年夏の宝谷合宿では、外に寝転んで満天の星空と天の川を眺め、子どもたちからは「見えた！すごい！」と歓声がありました。

釜磯海岸(遊佐)

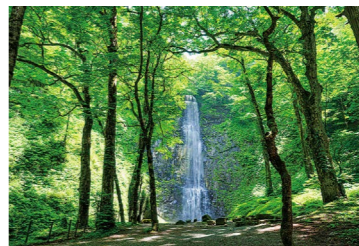
砂浜にボコボコと湧き出す水は鳥海山の伏流水で、手や足を入れるとひんやり。自然の造形を間近で見ることができます。



マリナーパークねがせき(鶴岡)
玉砂利のビーチなので砂まみれになることもなく、安心して遊べる環境が整っています。

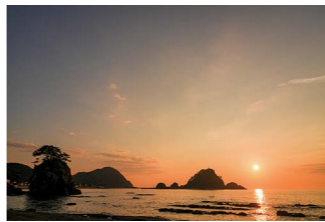


眺海の森(酒田・松山地域)
庄内平野が一望できて、鳥海山も見える絶景スポット。芝生の丘もあって子どもたちを遊ばせるには最高です。



玉簾の滝(酒田・八幡地域)
落差63メートルのダイナミックな光景に子どもたちも大興奮！天然のミストを浴びる涼やかな庄内の避暑地。

P8,9の写真提供=gacktomo



由良海岸(鶴岡)
「日本の渚百選」の美しい海岸で、浅瀬には海の生き物も。白山橋を渡って散策もおすすめ。



月山高原(鶴岡)
夏の月山高原は広大なひまわり畑が。写真を撮ったり、迷路で遊んだり。

いしいを届けてくれる生産者さんとおいしい生産物をさらにおいしい料理へと変身させる料理人さん、食にまつわる皆さんがチームを組んだ食育活動「サステイナ鶴岡」に、記録撮影で関わらせてもらいました。畑での収穫体験などを通して、子どもたちの目がキラキラ輝き表情が豊かになっていくのを目にして、自然には多くの学びがあると感じました。子どもは地域の宝物。大切な宝物のみんなに庄内の魅力を探求してもらえたらうれしいな。

山、里、海の距離も近く、生産者と料理人の距離も近い庄内は、旬の食材をこの土地で味わえる豊かさがあり、自然の循環が土地の暮らしと文化を支えています。季節ごとの自然の変化を身近に感じる生活、食を通して自然や人とのつながりを感じられる生活こそが、「庄内らしさ」です。生活の延長線上にある風景や食を感じながら、この夏は親子でぜひ素敵な思い出づくりを！



楽智 gacktomo さん

夕陽や四季の風景をライフワークに、家族写真や地域行事など幅広い被写体を手がける。近年は「庄内の魅力を未来へつなぐ」をテーマに、郷土学習コンテンツ制作や子どもたちに故郷の素晴らしさを伝える活動も行っている。

明治の名棟梁、 高橋兼吉の 建物をめぐぐる旅



旧西田川郡役所(鶴岡)1881

初代県令の三島通庸の命によって建てられ、新たな象徴として洋風建築と時計台に挑んだ。

鶴岡、酒田を象徴する明治時代の名建築。

その多くを手がけた棟梁・高橋兼吉は鶴岡大工町の生まれです。

今回は子孫である櫻井田絵子さんから、

「兼吉おじいさんの物語」とのテーマで寄稿をいただきました。

名建築めぐりは、過去、現在、未来をつなぐ時空の旅です。



善寶寺五重塔(鶴岡市西郷地区)1893
善寶寺の要請で三人の棟梁(奥山富五郎・山本佐兵衛と)が協業した。十二支の細工、五階層の美しい組み手、免震構造の吊り下げの芯柱などさまざまな技術の粋が施された。



旧鶴岡警察署庁舎(鶴岡)1884
正面に突き出たベランダや上げ下げ窓、洋風の玄関ポーチなど西洋建築の意匠を取り入れた、和洋融合の「擬洋風建築」。

山居倉庫(酒田)1893

庄内米を全国に届ける海運につなぐ河川の船着場を備え、米穀保管に適した燻蒸方法の開発によって夏の暑さに耐える品質の維持が可能になったといわれている。



旧東田川郡役所(鶴岡市藤島)1887

最初の建物は火事で消失したため、純和風の建物に再建されたという。同じ敷地に洋風に再建された旧郡会議事堂と共に、地域の人に大切に活用・保存されている。



荘内神社(鶴岡)1877
酒井家の歴代藩主を慕う庄内一円の人々により鶴ヶ岡城の本丸御殿跡に創建された。宮大工として渾身の仕事だっただろう。

松ヶ岡蚕室(鶴岡市羽黒)1875

庄内藩の武士が刀を鋸に替えて開墾した土地に、建物には庄内藩の城の瓦を使うことで命が吹き込まれた。



子どもの頃、祖母が繰り返し語った昔話は「兼吉おじいさん」という明治の始まりに活躍した棟梁の話だった。「声が大きくてね、身体が大きくて、相撲が大好きでとっても強くてね」

高校生くらいになると、祖母の祖父は今で言う建築家で、まちの真ん中の致道博物館にある古い建物を作った人だとわかってきた。他にもたくさんさんの建物に関わったと聞いた。

「どこの現場でも職人たちと晩御飯を一緒に食べて、挑まれては相撲を取るんだけど、とっても強いからみんな大笑い。病気でいない人にもおにぎりを届けさせてたんだよ」

祖母は後妻であったが、わたしを実の孫のように可愛がってくれた。お正月休みには祖母の実家で過ごし、仏壇の左上に兼吉の肖像画と祖母の両親の写真が並んでいた。高橋家に残された手書きの年表によれば、兼吉は大工の次男で、生まれ育った大工町(現陽光町)で宮大工の修業をし、重臣で後に六十七銀行(現荘内銀行)頭取となった春山半内の紹介で、明治元(1868)年、23歳で東京牛込の政府御用大工、佐野友治郎の門を叩く。そこで当時の「新建築」を学び、特に洋風建築を習得してきたという。

「東京にひとり歩いて行ったんだよ。帰りに山賊に遭ってね、投げ飛ばされたら逃げたって」

鶴岡に戻ると、真っ先に1875年松ヶ岡の大蚕室を建築する。やがて、藩主ご普請係の後を継いで、翌年31歳で棟梁になった。今から150年前のことだ。

「新聞もテレビもない時代に、このまちの人が新しい時代を建物で知ることになるって、張り切っていたんだよ」

今でも祖母が語る声が聞こえてくるようだ。

「兼吉おじいさんの口癖は『建物は人がつくる』だったんだよ」
子どもの頃は言葉どおり受け止めていた。今、わたしの頭の中に浮かぶこの言葉の情景は、職人たちと本気で話し合い、最後には笑い声が弾ける現場創造力と伝統の技術で彼らが描いた未来に、わたしたちはいるのだろうか。そして、わたしたちが次の時代のために取り組むことをきつと応援してくれる。



櫻井 田絵子さん

致道博物館にて高橋兼吉さんの肖像と。櫻井さんは人財醸成家・ファンリテーターとして人財教育、文化振興に尽力中。鶴岡市在住。



特集
わたしたちの
庄内旅



ひやくねん森(鶴岡市三瀬)

春には孟宗筍が顔を出し、夏は新緑に覆われる森。散策や孟宗掘り、薪割りなどの山仕事、木工クラフト、窯でのピザ焼きなどさまざまな体験が楽しめる。写真左は事務局の佐藤竜太さん(日承循環合同会社代表)、右はひやくねん森副代表の加藤章さん。

写真提供=メタジェンセラピューティクス



つるおか献便ルーム

見学は要事前予約。お問い合わせは
contact@chomusubi.metagentx.comまで。



写真提供=メタジェンセラピューティクス

石沢 成美さん

1995年生まれ。腸内細菌叢移植の社会実装を目指すメタジェンセラピューティクス株式会社つるおか献便ルーム長。新聞記者を経て2025年に鶴岡へ移住。日本初の「献便ルーム」の立ち上げ・運営に携わる。週末の楽しみは、産直をめぐって季節の食材で料理をすること。



初夏の「腸活のまち」をめぐる旅

日本初の「つるおか献便^{けんべん}ルーム」が鶴岡に開所して1年。腸内細菌を生かして難病治療や新薬の開発に挑む研究拠点が鶴岡に置かれているのは、この地域の生活環境に一つの理由がありそうです。出会った場所や人々、最先端医療へとつながるその現在地を訪ねました。



写真提供=メタジェンセラピューティクス

blanc blanc gastropubのCircular(庄内腸活)ランチ

「Circular(庄内腸活)ランチ」は3日前までに要予約、3,500円。週に30種類以上の植物性食品をとる人の腸内環境の多様性が高いとする研究結果[※]もある。

※McDonald D et al. (2018)



産直あさひ・グー(鶴岡・朝日地域)
「やまのごっつおまつり」は、年11回の開催(8月を除く毎月)。季節ごと約30種類もの品数が一挙に店内に並び、いわば山のデリカテッセン。常連客は思い思いの容器を持参するなど、毎回行列ができる盛況ぶり。



写真提供=やまぶし温泉ゆぽか



やまぶし温泉ゆぽか(鶴岡市羽黒)
日帰り旅の疲れを癒やすのにぴったりな大浴場。入浴は大人1回券500円。庄内の日帰り入浴施設をめぐるとの旅の楽しみ。

写真提供=やまぶし温泉ゆぽか



※情報、値段はすべて2026年5月現在のものです



知憩軒(鶴岡・楡引地域)

自家栽培の野菜を使った郷土料理を提供しながら、民宿を営み、旅人と語り合う長南さん。「文化は心をつくり、食は体をつくる」と力強く語る。自然の産物にやさしく手を添えた料理は体の中からととのう感覚。食事、宿泊とも要予約。



鶴岡で暮らすようになって、不思議に感じることもある。ユネスコ食文化創造都市でもあるこの土地の文化は、「おなかと心から体を整える」ためにしつらえられている気がするのだ。

旅の始まりは、三瀬地区の「ひやくねん森」から。林業でにぎわった杉林を地元住民が手入れし、循環する森づくりを進めている。百年先を見据えて山の恵みを育む人の声を聞き、土と木々の匂いを胸いっぱい吸い込んだら、山の恵み、野の恵みをいただきに鶴岡駅前の「blanc blanc gastropub」へ。庄内の食材を慈しみ生かす五十嵐督敬シェフが創り上げた「Circular(庄内腸活)ランチ」には、山菜や野菜などの植物性食品が30種類以上盛り込まれている。在来作物が60種類もある鶴岡ならではの、腸を整える一皿だ。続いて食の人を訪ねるなら「知憩軒」の長南光さん。農家レストランの先駆けであり、鶴岡の食文化を支えてきたお一人でもある。「体を整えるのに、特別なことは必要ない。日常にある恵みをそのままいただくだけですよ」。

旬の恵み、季節のめぐりは、産直に行けばいつでも実感できるの面白い。「産直あさひ・グー」ではほぼ毎月、地元のお母さんたち手作りのご馳走を販売する「やまのごっつおまつり」が

開催されている。ひとつ140円の手頃な価格で、夕食にぴったりの一品やおやつにしたい「笹巻き」まで勢ぞろい。おなかの空き具合と相談しながら、気になる惣菜を両手一杯に抱えてしまう。移動で疲れた体は、「やまぶし温泉ゆぽか」に預けて。出羽三山のふもとから湧くこの湯は、体も心も芯からほぐしてくれる。

最後に、2025年4月にオープンしたつるおか献便ルームも紹介したい。健康な「腸内細菌ドナー」の方に未来の薬の原材料となる便を提供していただく、日本初の「献便施設」だ。豊かな食文化が根付き、普段の食事に食物繊維がふんだんに使われている鶴岡は、腸の力を生かす研究に適した地。鶴岡の食と文化がおなかを育み、健康な腸内細菌が世界の患者さんへ届く、そんな循環がここから生まれようとしている。

鶴岡の自然と食に浸り、未来を見る。おなかと心を整える日常が、ここにはある。



特集
わたしたちの
庄内旅

でも庄内は、吹浦、狩川、酒田、大山、湯野浜、加茂などを転々として10年余りを暮らし、自分の帰るべきところとまで記している。森さんが賞を受賞した当時、僕は中学生でテレビのワイドショーで森さんの姿を見た記憶があるが、小説を初めて読んだのは社会人になってからだ。『月山』を読んだ後、実際に体験したくて秋の注連寺に泊まりに行った（泊まりはたった一人だった。今は泊まらないかもしれない）。鉛筆画の木下晋さんの天井画をはじめ、ユニークな天井画が描かれた絵もあるが、何とんでも鉄門海上人の即身仏の存在感に圧倒された。出羽三山の山伏修験は胎蔵界の修験で一度胎内に戻り、生まれ変わる修行といわれるが、『月山』という小説はその修行と通底するものがあるようにも思えた。

『鳥海山』という短編集の中には、酒田の燈屋など知った場所がたくさん出てくる。中でも吹浦を舞台にした『鷗』では、登場人物たちが歩いたところが目に浮かぶ箇所が多数ある。

吹浦の町から西浜へ歩く橋（今はもう木造ではないが）から見た山腹しか

見えない鳥海山、西浜のキャンプ場の松林、庄内砂丘。今回、森さんの歩いた道を知りたくて、森さんの住んでいた吹浦布倉から十六羅漢を、地元で米穀店を営む筒井義昭さんに案内してもらったところ、当時の同線はなんと海禅寺の大きな墓地の真ん中を通っていた道だった。ここは月光川を挟んで西浜の対岸の山の上にある。川を挟んで生者と死者が対峙していると森さんは感じたのだろう。森さんは奥さんと奥さんのお母さんと歩いた夕焼けに魅せられて吹浦に住んだと書いているが、時代を経てもその夕焼けの美しさは変わらない。



池田 はじめさん

遊佐町出身、鶴岡市在住。表現集団エッグ・プロジェクト主宰。劇作家・演出家。言語学者齋藤秀一、綴織作家遠藤虚頼など地元を題材とした台本多数。10月17日、18日に酒田大火を題材にした演劇『風の棲む町（原作ねじめ正一）』を酒田市総合文化センターで上演予定。

映画やアニメでは、ファンがその舞台となった土地や場所を訪ねて歩く「聖地巡礼」が時々話題になる。森敦さんの庄内での足跡を訪ねることもそれに似ている。旧朝日村の注連寺での滞在経験を基にした小説『月山』で62歳で芥川賞を受賞した森さんは10年働き、10年放浪するという生活を送っていたと自ら書いている。その中



写真提供=黒井卓也

湯殿山注連寺（鶴岡・朝日地域）

1951年、森敦が一冬を過ごした、小説『月山』の礎。風雪をしのぐために作った寺の祈祷簿の和紙を張り合わせた蚊帳は小説にも登場する。写真は映画『月山』のセット。



写真提供=黒井卓也



松河山 海禅寺（遊佐）

妻の場と庄内で最初に住んだ吹浦。「鳥海山の山裾の道を十六羅漢のあるあたりまで歩き」とあるのは、現在の海禅寺から下りる旧道沿いの道と思われる。その日の夕焼けは「観無量寿経の世界にいるようだ」と妻と話した一節も。



大山公園（鶴岡）

庄内の中でも大山に二度住んだのは、大山公園から月山と鳥海山を眺めることができたため、と語っている。

南光坊坂（遊佐）

鳥海山大物忌神社吹浦口の宿坊の一つ「南光坊」の修験者が、断崖の難所を切り開いたとされる古道。湯の田温泉や象潟方面にもたびたび行っていたようで、この絶景の道を歩いたと見られる。

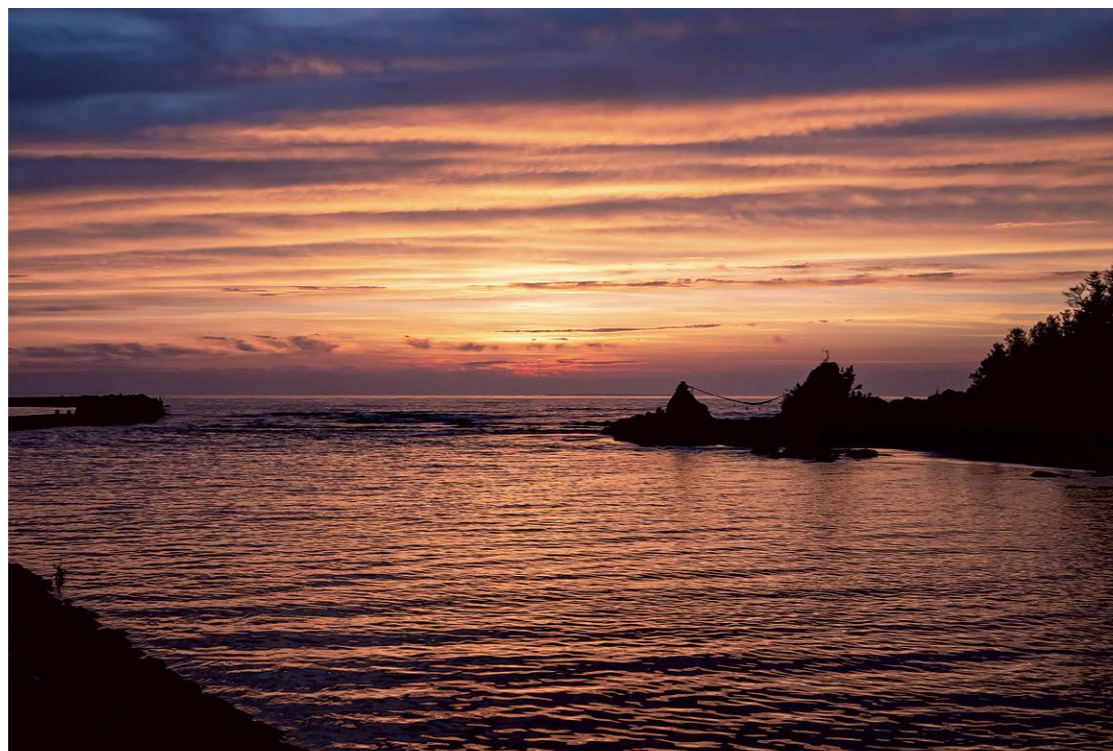
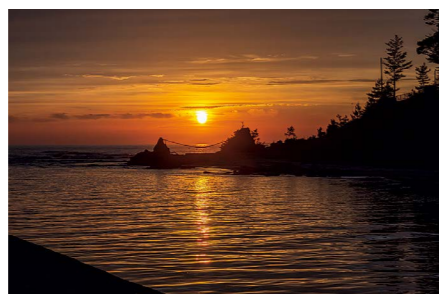


西浜海岸（遊佐）

妻の場と2人で浜の流木を集めたり砂丘で松笠を拾ったりして薪炭の材にしていた。その様子は『鳥海山』でも描写されている。

吹浦の夕日（遊佐）

最初に庄内を訪れたのは、妻となる場との結婚を決める吹浦行。場の母と話しながら歩いた日の夕焼けは形容しがたい美しさだったと書いている。



作家森敦の庄内を訪ねる

森敦が庄内を初めて訪れ眺めた西浜の夕日、そして「わがふるさとのごとく転々として歩いた」その足跡。湯殿山注連寺での一冬を通して書き上げた小説『月山』の原風景。森敦が人生を放浪してたどり着いた自らの文学、その足跡を、劇作家の池田はじめさんと一緒に訪ねました。